

食マネジメント学部 2019 年度教員紹介

朝倉 敏夫 (あさくら としお)



■専門分野

韓国社会論、社会人類学

■所属学会

日本文化人類学会、日本民俗学会、和食文化学会、韓国文化人類学会

■これまでの研究の概要

韓国社会を家族・親族と食文化の視点から研究してきました。1979年に初めて韓国を訪れ、1980年から全南大学校に修学しつつ、南西部の島嶼地域にある都草島でフィールドワークをしました。その後、韓国社会の変化について調査・研究するとともに、中国朝鮮族、コリアンアメリカン、サハリン韓人など、海外コリアンの生活文化についても調査・研究してきました。

1988年から国立民族学博物館に勤め、「朝鮮半島の文化」展示のリニューアル、特別展「2002年ソウル・スタイルー李さん一家の素顔のくらし」、特別展「韓日食博ーわかちあいとおもてなしのかたち」などを開催、NHK韓国ドラマ「宮廷女官チャングムの誓い」「イ・サン」「馬医」「仮面の王ーイ・ソン」などの日本語版監修をしました。

■主要研究業績

『日本の焼肉 韓国の刺身』農文協、1994年

『世界の食文化①韓国』農文協、2005年

『韓国食文化読本』（林史樹・守屋亜記子と共著）国立民族学博物館、2015年

■今後の研究の方向性

これまでの研究を継続して、韓国の食文化、日韓食文化の比較研究に従事するとともに、「食科学」という学問分野の確立を目指してゆきたいと考えています。

天野 耕二 (あまの こうじ)



■専門分野

環境システム分析

■所属学会

日本LCA学会、土木学会、廃棄物資源循環学会、環境科学会、水環境学会

■これまでの研究の概要

学生時代は、数値モデルによる河川水質の予測手法に取り組みました。最初の職場（国立環境研究所）では、河川や湖沼の水質データモデリングに関する研究に従事しました。立命館大学理工学部環境システム工学科着任後は、環境への負荷を総合的に評価する仕組みや枠組みについて様々な視点から研究しました。具体的には、資源循環やエネルギー需給などに関わる環境データの解析と評価、ライフサイクルアセスメントやマテリアルフロー分析などです。研究室のキャッチフレーズは「環境問題のコンビニ」。専門性にとらわれず、研究に必要な学問分野は全て取り込んで、社会や経済の現実をとらえながら文理融合型の研究を試みていました。

■主要研究業績

食料消費に関わる世界の淡水資源需給バランスに対する国際貿易の影響評価, 日本LCA学会誌, Vol. 14, No. 1, pp.21-35, 2018

Greenhouse gases reduction potential through consumer's behavioral changes in terms of food-related product selection, Applied Energy, Vol. 162, 1564-1570, 2016

人口・世帯構造変化を考慮した日本における食料消費に伴う環境負荷のシナリオ分析, 環境情報科学論文集, Vol.25, pp.125-130, 2011

■今後の研究の方向性

フードマネジメント領域における「食をめぐる資源循環や環境影響」に関わる研究を進めたいと考えています。例えば、食料消費に関わる淡水資源需給、地産地消や旬産旬消による環境負荷低減効果、各国別の食料消費に伴う温室効果ガス排出推計とその低減施策、弁当容器ごみリサイクルや生ごみ再資源化システムの総合評価、食の消費形態（外食・中食・内食）の違いによる環境負荷比較、などです。

荒木 一 視 (あらかき ひとし)



■専門分野

地理学、人文地理学、経済地理学

■所属学会

日本地理学会、人文地理学会、経済地理学会、フードシステム学会 他

■これまでの研究の概要

学位論文を基にした「フードシステムの地理学的研究」(2002 大明堂 単著)をはじめとし、地理学におけるフードシステム研究が初期のテーマでした。その基盤の上に、日本をはじめインド、中国、韓国、台湾などのアジア各地で研究を進めてきました。「アジアの青果物卸売市場」(2008 農林統計協会 単著)。その後、フードレジームや商品連鎖、あるいは風土論にも触手を伸ばし、内外での研究を重ねてきました。「モンスーンアジアのフードと風土」(下記(1))、「食料の地理学の小さな教科書」(下記(2))。また、現在は戦前のアジアの食料貿易に着目した研究に取り組んでいます。「近代日本における食料の地理学」(2018 海青社 単著)。

■主要研究業績

- (1) 「モンスーンアジアのフードと風土」横山・荒木・松本編 2012 明石書店
- (2) 「食料の地理学の小さな教科書」荒木編 2013 ナカニシヤ出版
- (3) 「救援物資輸送の地理学」荒木ほか 2017 ナカニシヤ出版

■今後の研究の方向性

フードレジーム論、商品連鎖のアプローチ、フードネットワーク論などこれまで取り組んできた食科学の地理学のアプローチを継続します。具体的には近代アジアの食料流通や風土論に着目している。また、「自然災害と食」などの新たな食科学研究にも取り組みます。加えて荒木は「日中韓地理学者会議」を創設するなど、中韓の地理学界とは強固な関係を構築している。

この人的ネットワークも活用できればと考えています。

阿良田 麻里子 (あらた まりこ)



■専門分野

食文化研究、文化人類学、言語人類学、言語学、インドネシア地域研究

■所属学会

日本文化人類学会、東南アジア学会、家政学会、日本認知言語学会、
日本インドネシア学会、日本栄養学教育学会

■これまでの研究の概要

日本語教師としてインドネシアの大学で勤務した後、インドネシアの言語文化の研究を始め、修士論文(東京外国語大学)ではインドネシア語・日本語の調理動詞・料理名称の対照研究から、料理の通文化研究の方法論を提言しました。

博士課程(総研大)では西ジャワ農村で長期調査を行い、言語人類学的アプローチからスダの食文化を研究しました。その後、都市部へと対象を広げつつ、国立民族学博物館、東京工業大学「ぐるなび」食の未来創成寄附講座等で、生活文化としての食文化、食に関わる認識・選択・行動、食生活の変容等について研究してきました。現在はおもに、ハラール食をはじめ、食の禁忌をもつ人々の食選択に関心をもっています。

■主要研究業績

- 『世界の食文化6 インドネシア』(単著、農文協 2005)
『文化を食べる 文化を飲む グローカル化する世界の食文化とビジネス』(編著書、ドメス出版 2017)
『食のハラール入門 今日からできるムスリム対応』(単著、講談社サイエンティフィック 2018)

■今後の研究の方向性

生活文化としての食文化や、食に対する認識が、消費者の行動に与える影響について、文化人類学的なアプローチから研究します。食のハラール研究を国際共同研究へと発展させるほか、基礎研究として、世界各地の食ビジネスや食生活の変容・現状について国内諸機関の研究者と共同研究を行い、情報を集積したいと思います。

井澤 裕 司 (いざわ ひろし)



■専門分野

金融論、行動ファイナンス、実験経済学

■所属学会

日本経済学会、日本金融学会、日本ファイナンス学会、パーソナル・ファイナンス学会

■これまでの研究の概要

主に行動ファイナンス分野での研究に携わってきました。従来の経済学は、経済活動を行う人々は「合理的」な基準で選択行動を行うことが仮定されていました。特に金融・ファイナンスの分野は直接お金を対象とした行動を分析するので、出来るだけ多くのお金を「合理的に」稼ごうとするのは当然のことだと思われていたのです。けれども現実の行動を見てみると、必ずしも合理性だけでは説明できない選択が系統的に行われていることが明らかになってきました。これらの従来の経済理論では説明できない行動がどのように現れ、その結果、何がもたらされるのかを、理論的に明らかにし、実験によって検証していく研究を行ってきました。

■主要研究業績

Borrowing Behavior and Attitudes Towards Risk and Time; Experimental Approach, *Journal of International Finance and Economics*, 2011.

Non Expected Utility Maximizers Behave as if Expected Utility Maximizers: An Experimental Test, *Journal of Socio-Economics*, 2008.

『実験でわかった！感じる株式投資』ランダムハウス講談社 2008.

■今後の研究の方向性

1) 食に関わるリスク認知と満足度測定の行動経済学的分析

人々の食選択行動を分析するための、リスクの主観的評価と満足度の計量化のための基礎的研究。

2) 食研究における計量分析のAI（人工知能）と機械学習の応用

人々の複雑な食選択行動を、従来の手法とは異なるAIを活用した分析手法の適用の可能性を研究。

石田 雅 芳 (いしだ まさよし)



■専門分野

イタリアの食文化、スローフード哲学と食のアクティヴィズム

■所属学会

和食文化学会、全日本・食学会、日本家政学会食文化研究部会、スローフード・ジャパン、

Centro Guida (フィレンツェ市公認ガイド協会)、Italian Chamber of Commerce in Japan

(在日イタリア商工会議所)、Associazione Verace di Pizza Napoletana (真のナポリピザ協会)

■これまでの研究の概要

スローフード協会イタリア本部の唯一の日本人スタッフとして、スローフード・ジャパンの創立を始め、食の国際ネットワークにアジア初として日本の参加を促しました。スローフード・アワードでは佐賀県の古代米生産者を調査し、日本初の受賞者とすることに成功。また食科学大学（イタリア）の開学時より日本人学生のエントリーと学生生活をサポート。同大学での地域学習の一環として日本における実習をスタートさせ、食科学研究への日本食文化の導入に尽力しました。

日本人初のフィレンツェ市公認観光ガイドとして、現地で美術や食をテーマとしたセミナーを企画。日本人や現地の青少年の文化教育活動にも従事しその普及に貢献しました。

福岡県若狭町における地域資源（水産資源）等と海外展開調査研究事業に従事。漁業資源の国際イベント開催のために尽力。国際シンポジウムでは「熊川宣言」を起草し、イタリアの伝統魚加工食品の関係者たちと共に採択されました。伝統地域食材の持続性のある利用とその再評価を文化的なコンテキストで捉えました。

■主要研究業績

『スローフードマニフェスト』（共著、木楽舎、2004年）

『スローフードの奇跡』（単独訳、三修社、2009年）

『食と農のコミュニティ』（共著、創元社、2013年）

■今後の研究の方向性

世界の諸機関とのネットワーク構築を通じた国際的食文化研究の推進。

イタリアにおける食をテーマとした地域政策の成功例について調査研究。

イタリアの食・味覚教育のメソッド研究。

トリノ水研究所 SMAT とのコラボレーションによる水テイasting・プログラムの構築。

大和田 和 治 (おおわだ かずはる)



■専門分野

英語教育学・応用言語学

■所属学会

Pan-Pacific Association of Applied Linguistics, The Japan Association of College English Teachers

■これまでの研究の概要

私はこれまで、英語を媒介言語とするテレビ会議を利用した異文化交流の実践研究、日本人英語学習者の英語動詞の習得研究、英語の発音・イントネーションおよびプレゼンテーション指導法の開発、教材開発などを行ってきました。

■主要研究業績

『英語教育の実践的探究』(分担執筆) 溪水社、2015年
『英語教育グローバルデザイン』(分担執筆) 学文社、2005年
『応用言語学事典』(分担執筆) 研究社、2003年

■今後の研究の方向性

英語学習の根幹をなす発音・イントネーション、コミュニカティブ・グラマーを中心に授業を展開し、学生が自分の専門分野について自信をもって効果的に英語で発信できるような手助けをしたいと考えています。また、本学部生と海外の学生との英語による異文化交流を、遠隔授業を通して行いたいと思います。

小 沢 道 紀 (おざわ みちのり)



■専門分野

マネジメント、マーケティング、観光 他

■所属学会

日本経営学会、日本流通学会、ドラッカー学会

■これまでの研究の概要

これまで、ホスピタリティ産業に関わる経営課題から研究を始め、無形のモノを販売する企業や産業の経営課題について幅を拡げる形で、多角的に研究を行ってきました。さらに、人材の開発や獲得などに関する課題、人材と関わって、少子高齢化による人口減少下の日本の地域を維持・発展していく課題についても探求しています。

実際のフィールドに接し、フィールドの現状や課題に接することで、理解を深め、課題を解決するための具体的な行動が可能となるように心掛けています。

■主要研究業績

小沢道紀 (2016) 「ホスピタリティ再考」『立命館経営学』Vol.54 4号、pp.177-194
小沢道紀、宮城博文、藤田聡、大友智 (2013) 「「地域の担い手の育成とその可能性： - 「高知県」および「いなかパイプ」を事例として - 」『日本観光研究学会全国大会論文集』Vol.28、pp.245-248
小沢道紀 (2012) 「大学生協同組合の発展と今後 - 立命館生活協同組合を事例として - 」『ビジネスの発見と創造』pp.255-269

■今後の研究の方向性

今後については、特に持続可能な地域という視点から、地域に活力をもたらすために必要な事の探求や、実際に必要な行動を継続していきます。また併せて、その重要なコンテンツとなる食について、価値を向上させ、より多くの所得や地域の誇りにつながるよう意識していきたいと思っています。

金井 壽 宏 (かない としひろ)



■専門分野

経営学（組織行動論、経営組織論、キャリア論）

■所属学会

経営行動科学学会、組織学会、産業組織心理学会

■これまでの研究の概要

経営学とりわけ組織行動論の分野において、組織の中の人間行動という従来の研究の前提から、モチベーション、キャリア、リーダーシップ、組織変革、組織開発のテーマに加え、仕事人生の充実や幸せ、やりがいといった、働く人々にとっての組織行動論の新たなあり方を研究してきました。

また、リーダーシップ開発をキャリア発達とモチベーション喚起と結びつけながら、推進しています。経験と経験から生まれた持論についての調査研究を行いながら、キャリアの節目におけるモチベーションの問題や画期的なイノベーションを実現したエンジニア、サイエンティストの皮むけた経験についても調査してきました。

■主要研究業績

『変革型ミドルの探求』白桃書房、1991年

『企業者ネットワークの世界』白桃書房、1994年

『組織エスノグラフィー』有斐閣、2010年

■今後の研究の方向性

時間展望の心理学と希望の心理学を、モチベーションとキャリアの結びつきの研究に生かす方策を探索研究しています。働く個人も組織も幸せになるための組織行動について、食科学の視点からもアプローチしていきたいと考えています。

加部 勇一郎 (かべ ゆういちろう)



■専門分野

中国文学、物語と図像、児童文化

■所属学会

中国人文学会、日本中国学会、中国古典小説研究会、日本中国語学会、中国文芸研究会

■これまでの研究の概要

大きく二つあります。

一つは、19世紀の音韻学者が書いた『鏡花縁』という小説の研究です。『鏡花縁』は、作者の博識と女権意識が詰め込まれた、旅行文学であり遊戯文学ですが、この長大で荒唐無稽な物語を解きほぐし、過去の小説の影響や作者独自のこだわりを抽出し、それらの要素を解釈することに従事してきました。

もう一つは、児童雑誌や漫画、連環画（絵入り読み物）やアニメーションの研究です。これら20世紀の児童向けメディアにおける、物語の図像化や歴史の変遷の分析に従事してきました。

■主要研究業績

・武田雅哉・加部勇一郎・田村容子編著『中国文化 55のキーワード』（ミネルヴァ書房、2016）

・中国モダニズム研究会編『ドラゴン解剖学 竜の生態の巻：中華文化生活誌』（分担執筆。関西学院大学出版会、2018）

・加部勇一郎著『清代小説『鏡花縁』を読む：19世紀の音韻学者が紡いだ諧謔と遊戯の物語』（北海道大学出版会、2019）

■今後の研究の方向性

- ・清代文人の日常生活と世界認識
- ・20世紀における中国古典小説の視覚化
- ・自伝や回想録に見える食の記憶

鎌谷 かおる (かまたに かおる)



■専門分野

歴史学 (日本史)

■所属学会

日本史研究会、社会経済史学会、大阪歴史学会、地域漁業学会、日本村落研究学会、環境社会学会、交通史学会

■これまでの研究の概要

- ① 近世日本漁業史研究
江戸時代から明治期にかけての琵琶湖の漁業権や消費と流通、養魚技術についての研究
= 生業という視点で日本社会の歴史を解明する
- ② 地域史研究
滋賀県高島市マキノ町知内をフィールドに、歴史学・民俗学・社会学の研究者とともに地域の生活文化を「地域に学び・地域で学び・地域と学ぶ」研究を展開
= 地域の生活文化資料の総合的な研究 (古文書調査・民俗調査)
- ③ 近世日本の農業生産力と気候変動の研究
古気候学の研究者との共同研究 (文理融合型研究)
= 過去の気候変動に日本社会がどのように対応していたのかを解明する (米などの農業生産問題を中心に)

■主要研究業績

「日本近世における年貢上納と気候変動－近世史研究における古気候データ活用の可能性をさぐる－」(『日本史研究』646号、2016年、共著)
「日本近世における山野河海の生業と所有－琵琶湖の漁業を事例に－」(『ヒストリア』229号、2011年、単著)
「暮らしと歴史のまなび方－知内「村の日記」からの出発－」(『村の日記』研究会編、2010年、共著)

■今後の研究の方向性

- ① 「食」に関する日本の歴史資料の調査 (所在把握・整理作業・データ化) と研究
- ② 滋賀県の食文化研究
滋賀県の食に関するさまざまな資料 (古文書・民具・日記) の調査や、聞き取り調査の実施
- ③ 人と食との関係史研究
日本各地の人と食との関わりの歴史を「魚」を通して総合的に分析する
- ◎ 日本の長い歴史における「食」の意味を考える

木村 裕 樹 (きむら ひろき)



■専門分野

民俗学

■所属学会

日本民具学会、日本民俗学会、日本口承文芸学会、近畿民具学会、京都民俗学会

■これまでの研究の概要

日本の職人と民具の研究の二つです。職人の研究では、椀や盆など挽物の漆器の素地をつくりだす木地屋について、民俗学をベースに地域的な産業史、工芸技術史の観点から研究してきました。木地屋は伝説上、その工具である木工ろくろを発明したことから「木椀元祖」とみなされる惟喬親王を職祖と仰ぎ、近江の小椋谷を発祥地として全国に移住したとされています。

私は、移住先である会津漆器と山中漆器の産地でもに長期的なフィールドワークをしてきました。一方、民具の研究では、国立民族学博物館が所蔵するアチックミュージアム・コレクションの学史的な研究、欧米の博物館が所蔵する在外日本コレクションの実態調査にも従事してきました。

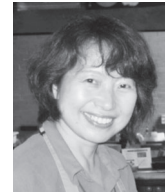
■主要研究業績

木村裕樹「復活する伝承－現代における山中漆器の沿革をめぐる新しい動き」『京都民俗』25号、2008年。
木村裕樹「鈴木式轆轤の普及と担い手の顕彰－明治後期・大正期の福島県会津地方を中心に」『民具マンスリー』42巻10号、2010年。
木村裕樹「木地屋「根元地」の近代」日次紀事研究会編『年中行事論叢－日次紀事からの出発』岩田書院、2010年。

■今後の研究の方向性

日本の食生活の地域的な変遷を、民具はもとより文献やフィールドワークによって得られた資料を縦横につかって研究します。木地屋は当然のこととして、食の起源や伝承、発祥地や記念日を手がかりに、地域の伝統食文化の研究をおこないます。また、世界と日本の食をめぐる交流も視野にいれ、総合的な食文化研究をめざします。

國 枝 里 美 (くにえだ さとみ)



■専門分野

官能評価 (匂い、食品、化粧品)、匂いの生理心理効果、消費者調査

■所属学会

日本味と匂学会、日本官能評価学会、においかおり環境学会

■これまでの研究の概要

食品開発のためのフレーバーの官能評価および化粧品開発における匂いの生理心理効果を主な研究対象と取り組んできました。官能評価では、パネルの選定と教育訓練、試料選定、評価用語の選定や新しい手法の導入を行う一方、味と匂いの相互作用、匂いの選好に関する国際比較、視覚と嗅覚の相互作用、差異などについても検討してきました。一方、マーケティングにおける嗜好調査では、コンシューマーインサイト部門の立ち上げに携わり、消費者調査に官能評価の考え方や手法を導入しました。香料の機能については、分析化学技術、調合技術と官能評価から、いくつかの特許の取得に至っています。匂い教育についても取り組み、博物館の展示やイベントに協力してきました。

■主要研究業績

S. Kunieda, D. Paredes, Technical, consumer and sensory recognition of "Koku" providing flavor, Pangborn Sensory Science Symposium 2017

The current state and future prospects of sensory evaluation, J. Japan Association on Odor Environment Vol. 45 No. 5 2014 (Japanese)

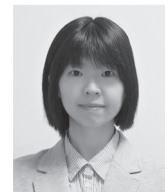
嗅覚と匂い・香りの産業利用最前線, エヌティーエス 2013 (分担執筆)

■今後の研究の方向性

料理や食品、飲料などを特徴づける匂いや味の成分は、それらの美味しさにも貢献しています。一方、食べ物の風味の特徴を適切な言葉で表現することは容易なことではありません。官能評価や嗜好調査、生理計測から匂いや味の特徴を示し、同時に人の感覚や感情、行動への匂いの影響を把握し、食や環境における匂いの役割を考えていきます。

キーワード：匂い、食、官能評価、嗜好調査、生理計測

酒 井 絢 美 (さかい あやみ)



■専門分野

会計学 (財務会計、監査論)

■所属学会

日本会計研究学会、日本監査研究学会

■これまでの研究の概要

私はこれまで、主に実証研究と事例研究という2つのアプローチにより、財務会計や監査論の領域の研究を進めてきました。

財務会計に関しては、株式公開 (IPO) 時における会計基準の適用や、特性のある企業の会計分析などを行っています。監査論に関しては、上場企業の監査人の交代や監査品質、ビジネス・リスクといった論点の分析を行っています。

また、最近では、コーポレート・ガバナンスが企業の財務数値に与える影響についても関心を持っています。

■主要研究業績

「中小監査事務所の監査品質とクライアントのビジネス・リスク」『会計プロGRESS』第17号, pp.13-27, 2016年。

『京都企業の分析：歴史と空間の産物』第3章・第4章, 徳賀芳弘編著, 中央経済社, 2016年。

『財務報告論』第10章, 矢部孝太郎編著, 中央経済社, 2017年。

■今後の研究の方向性

これまでの研究を継続するとともに、今後は食マネジメントに係る会計学において特に効力を発揮すると思われる事例研究に注力することを計画しています。特に、外食産業における会計政策や企業情報開示 (IR) について興味があります。

清水裕子 (しみず ゆうこ)



■専門分野

英語教育学・応用言語学・言語テスト

■所属学会

日本言語テスト学会、日本テスト学会、大学英语教育学会、関西英語教育学会

■これまでの研究の概要

「測定と評価」への興味から、英語教育にその糸口をみつけ、Cloze Testの研究からはじまり、広く(浅く)言語テストの領域に基盤をおきながら現在に至っています。項目応答理論や潜在ランク理論などを用いた英語テストの分析も行ってきましたが、テストユーザーへのテスト理論の普及や理論研究と実践のネットワーク構築の重要性も認識しており、外国語としての英語/日本語の教師を目指す大学院生を対象に、言語テストの様々な観点の指導にも力を注いでいます。最近では、ある教育現場におけるスピーキング・テストのシステム構築や、既存のスピーキング・テストの妥当性の検証を行いながら、テスト開発と実施のための具体的な課題および問題点を探っています。

■主要研究業績 (3点)

Shimizu, Y. and Zumbo, B.D. (2005). A Logistic Regression for Differential Item Functioning Primer. *The Japan Language Testing Association Journal*. No.7, 110-124.

Sugino, N., Shojima, K., Ohba, H., Yamakawa, K., Shimizu, Y., & Nakano, M. (2014). Changes in Japanese EFL learners' proficiency: An application of latent rank theory. In D. Vicari, A. Okada, G. Ragozini, C. Weihs (Eds.) *Analysis and Modeling of Complex Data in Behavioural and Social Sciences*. Springer. 263-271.

清水裕子・桐村亮・野澤健 (2014). 「経済学部英語圏短期留学プログラムにおけるスピーキング・テストの実施とその結果報告」『立命館高等教育研究』14号、91-102.

■今後の研究の方向性

本学部の英語教員として英語プログラムの開発と指導にあたっています。その際、理想論に終わるのではなく、学習者にとっての necessities・lacks・wants の観点を忘れずにプログラム設計に関わる必要があり、現在、学習者の英語力やモチベーション等の情報をもとに、カリキュラムとテストの親和性に焦点を当てながら研究を進めています。

新村 猛 (しんむら たけし)



■専門分野

サービス工学、人的資源管理、生産システム論

■所属学会

日本経営工学会、日本経営システム学会、サービス学会

■これまでの研究の概要

食ビジネスの生産性向上を実現するためのアプローチとして、経営学、工学領域の知見を学際的に導入した技術開発、研究開発を中心に進めてきました。特に、人的資源・空間・時間的レイアウトデザインの最適化、AI、シミュレーション、データサイエンスを活用した生産システムデザイン、心理学分野、人的資源管理分野の知見に基づいたワークデザインや人事制度設計などが主な研究対象です。研究・開発されたシステムや方法論については、実経営環境下における有用性評価を重視し、社会実装するために必要な条件や制約を明確にすることに留意しています。研究対象は主に第3次産業ですが、食のバリューチェーン構築のため、第1次産業、第2次産業を対象にしたマクロのシステムデザインにも取り組んでいます。

■主要研究業績

・ T. Shimmura, K. Arai, S. Oura, N. Fujii, T. Nonaka, T. Takenaka, and T. Tanizaki: Multiproduct Traditional Japanese Cuisine Restaurant Improves Labor Productivity by Changing Cooking Processes According to Service Product Characteristic, *International Journal of Automation Technology*, Vol.12, No.4, (2018)

・ 新村猛, 藤井信忠, 竹中毅, 大浦秀一, 野中朋美: 担当組み換えによる日本料理レストランの労働時間短縮に関する研究, *日本経営工学会誌*, Vol.67, No.4, pp.303-313 (2016)

・ サービス工学 - 51 の技術と実践 -, 朝倉出版 (2012), 編集委員

■今後の研究の方向性

食の総合的デザインの研究に注力しています。調味料や素材、調理法のみならず、デザイン、知覚、原価、工程など、食を創造するために必要なあらゆる設計要素を統合的に構築し、食のイノベーションにつながる新たなデザイン工学、デザインマネジメント分野の確立を目指します。

高 田 剛 司 (たかだ たけし)



■専門分野

都市・産業政策、観光まちづくり、地域商業論

■所属学会

日本観光研究学会、日本計画行政学会、日本都市計画学会、国際公共経済学会、東南アジア学会

■これまでの研究の概要

まちづくりコンサルタント（技術士:建設部門、都市及び地方計画）として関西を中心に国内各地のまちづくり、地域おこしに携わってきました。総合計画や産業振興ビジョン、観光振興計画など各種行政計画の策定に関わるとともに、関連するアンケートやヒアリング調査の設計・分析にも数多く取り組んできました。また、各地の観光まちづくりや商店街振興において、住民や事業者が取り組む地域のビジョンづくりや活性化事業をサポートしてきました。

そのような実践的な調査・研究、事業支援に係る過程において得られた知見を基に、観光まちづくりプラットフォームの形成や、食を基軸とした観光振興についての研究に取り組んできました。

■主要研究業績

- ・『これでわかる！ 着地型観光』学芸出版社、2008年（共著）
- ・『地域のチカラ』自治体研究社、2009年（共著）
- ・『地域創造のための観光マネジメント講座』学芸出版社、2016年（共著）

■今後の研究の方向性

「食」は、農水産業、商工業、サービス業などあらゆる産業の「要」であり、地域の生活文化に根差したものです。今後、各地で求められる食を生かした地域経営や地域活性化、産業の振興について、どのような仕組みをデザインするか、持続可能な地域社会を形成するための組織形成や方策をテーマに研究を深めていきます。

田 中 浩 子 (たなか ひろこ)



■専門分野

食品流通（小売業、卸売業、外食・中食産業）マーケティング

■所属学会

日本流通学会、日本マーケティング学会、ドラッカー学会、日本栄養改善学会

■これまでの研究の概要

管理栄養士のビジネスマネジメント会社を起業したことをきっかけに、ビジネスパーソンとしての管理栄養士の評価方法や生涯学習、キャリアマネジメント、社員食堂における「品揃え」による食行動の変容、スポーツ栄養のビジネス化について実践し、学術的な分析を行い発表してきました。2000年代半ばより、食品スーパーマーケット、コンビニエンスストア、百貨店などの小売業や卸売業、外食・中食産業を研究フィールドとして、業態の変化、企業の経営戦略、生活者の購買行動・食生活の変化などについて「経営」と「栄養」の二方向から研究を深めています。

■主要研究業績

- 田中浩子「少子高齢化に対応する食品流通業」『ドラッカー学会年報 文明とマネジメント』、2016年。
- 田中浩子「コンビニエンスストアにおける顧客の創造 —セブン-イレブン・ジャパンの中食事業を中心に—」『立命館経営学』第54号4巻、2016年。
- 田中浩子「市場のグローバリゼーションと流通小売業」『ドラッカー学会年報 文明とマネジメント』第7号、2012年。

■今後の研究の方向性

1990年代アメリカでは、食品小売業は販売だけに留まらず、食事の困りごとを解決する場であるべきという考え方が示されました。日本ではこの考えに沿って中食の品揃えが増加したが、「日本型食生活」には十分に対応できていません。日本における「食生活の課題解決」とは何か、また食関連ビジネスの発展の条件は何かを探っていきます。

谷 垣 和 則 (たにがき かずのり)



■専門分野

国際経済学 国際貿易論

■所属学会

日本経済学会、日本国際経済学会

■これまでの研究の概要

1. 国際貿易論の理論的研究。

国際間資本移動や、移民などの国際間労働移動の国の GDP や所得分配などに与える影響や最適な政策（自由な移動か制限をかけるべきか）の分析。

国際貿易と国際環境問題の関係や政策問題、国際間資本・労働移動の下での関税や国際環境問題の分析。

日本の輸入需要関数の推計、リサイクルと国際貿易の関係、海外直接投資・海外アウトソーシングの選択、人的資本と財の質・生産性および比較優位の関係、教育政策と比較優位の関係の考察。

2. 平和の経済学

人的損失評価と兵員一人当たり軍備への影響、テロを含む非対称・非正規紛争の理論分析とその予防。

■主要研究業績

Recycling and International Trade Theory, Review of Development Economics 11, 2007/02

Defense Sector, Armaments-Labor Ratio and national Security, Defence and Peace Economics 17, 2006

An international trade theory with the notion of adaptability – endogenous quality and productivity –, Ritsumeikan University Faculty of Economics Discussion paper No.14003, 2014.

■今後の研究の方向性

食の国際貿易やそれに関する国際企業の活動、特に嗜好品の貿易、嗜好品のグローバル企業の展開。それに付随した各種文化、食文化の貿易および食貿易や食のグローバル企業戦略への影響の研究。

以上を元に、グローバル化による食の今後の動向予測、さらには食文化を促進あるいは守る役割を担う国の食に関する貿易政策を考察。

新 山 陽 子 (にいやま ようこ)



■専門分野

農業経済学、フードシステム論、食品安全学

■所属学会

日本農業経済学会、フードシステム学会、日本リスク研究学会、Society for Risk Analysis など

■これまでの研究の概要

農場から食卓まで、フードシステムにおける経済的関係の分析枠組みを提示してきました。その中心は、価格形成や品質調整のシステムです。また、農業経営の企業形態（家族経営や企業経営の特質）と存続条件、市場の状態（とくに、農業者、食品産業、食品小売業それぞれの競争構造と相互パワーバランス）、事業者の倫理、消費者の心理的な価格判断や購買行動に着目してきました。さらに、世界的に重要な問題となった食品安全対策のためのリスクアナリシス（科学的データとリスクの程度にもとづき健康保護措置をとる仕組み）の導入、その基礎となる双方向リスクコミュニケーションモデルの開発、市民のリスク知覚の国際比較研究を進めてきました。

■主要研究業績

新山陽子『牛肉のフードシステム－欧米と日本の比較分析－』日本経済評論社、2001年

新山陽子編著『フードシステムと日本農業』放送大学教育振興会、2018年

新山陽子編著『フードシステムの未来へ』（全3冊：[1]構造と調整、[2]生産者の存続、食品安全、[3]消費者の判断と選択行動）、昭和堂、近刊

■今後の研究の方向性

事業者や消費者の行動は、人間の認知能力に制約され有限合理的です。行動にはゆがみが生じることがあり、ルールや慣習が認知的な負荷の縮減に重要な役割をもちます。このような認識に立つ行動経済学、制度経済学により、事業者の取引行動、人々のリスク対応・食事選択行動、また倫理的な長期相互利益考慮行動の研究を進めます。

西村直子 (にしむら なおこ)



■専門分野

実験経済学、不確実性下の意思決定理論、ミクロ・ゲーム理論（入札、協調ゲーム、繰返し囚人のジレンマゲームなど）の理論・実験研究

■所属学会

日本経済学会, ESA (Experimental Science Association)

■これまでの研究の概要

人々のリスク選好と社会的選好を実験経済学的手法を用いて測定し分析します。リスク選好とは、ものごとが確率的に変動する不確実性に対する人々の考え方で、社会的選好とは自他の相互利害に対する考え方です。気候や人口構成の激変が予想される今後の時代に、個人や社会は不確実性を伴う困難や希望に直面します。非力な個人ではなく、集団として課題に立ち向かう必要があるとき、リスクや社会的選好を組み入れた分析の重要性が高まります。Nishimura, et al (2011) では非利己的経済人の存在が、入札市場の効率性を強化することを示しました。Aoyagi, et al (2019) では、利害対立が内包される状況でむしろ社会的選好が発動され、社会の効率性と公平性が向上することを示しました。

■主要研究業績

- ・Masaki Aoyagi, Naoko Nishimura, and Yoshitaka Okano, "Voluntary Redistribution Mechanism in Asymmetric Coordination Games," revision requested by *Experimental Economics*, 2019.
- ・西村直子, 井上信宏, 武者忠彦, 「未来人を呼び寄せる討議デザイン」『学術の動向』6月号, 「特集フューチャー・デザイン」, 日本学術会議, 2018年, pp.20-23.
- ・西村直子「複数単位取引入札市場の実験研究 - 米離れか, 自主流通米価格センター入札市場の機能不全か (査読付)」『人間行動と市場デザイン』(フロンティア実験社会科学第2巻), 第4章, 西條辰義編, 勁草書房, 2016年, pp. 81-121.

■今後の研究の方向性

これまでの理論・実験研究に「時間」の要素を導入し、長期的な考え方が社会や制度にもたらす影響を分析します。その応用として、摂取から発症までが長期にわたる食品リスクの分析をテーマの一つとします。また、長期的視点を社会制度構築にもたらす実践として、フューチャー・デザイン研究を継続発展させる予定です。

野中朋美 (のなか ともみ)



■専門分野

サービス工学, 生産システム工学

■所属学会

日本機械学会, 精密工学会, サービス学会, 人工知能学会, International Federation for Information Processing (IFIP) WG5.7 APMS (Advances in Production Management Systems)

■これまでの研究の概要

持続可能なサービス・生産システムにおいては、短・中・長期の視点で技術進歩や社会情勢など経営環境の変化を考慮したマネジメントが必要です。サービス現場や工場の製造フロアなどを含む広義のサービスシステムを対象にシステムとしてモデル化し、生産性向上と付加価値創出の研究を行っています。

- 人の情報を起点としたサービス生産システム設計・管理
- 食を起点とした地域価値共創のためのデータ収集・分析システム：個別クッキングプレート・ネットワーク・システムの開発
- エネルギーブロックモデルを用いた環境配慮型スケジューリング

キーワード：従業員満足, 経営・マネジメント, シナリオ分析, 最適化・シミュレーション, 地域活性, 食と AI, システムズエンジニアリング, システム x デザイン思考

■主要研究業績

1. An EOQ Model for Reuse and Recycling Considering the Balance of Supply and Demand, *International Journal of Automation Technology*, 9 (3), 303-311, 2015.
2. Energy Consumption in the Food Service Industry: A Conceptual Model of Energy Management Considering Service Properties, *Advances in Production Management Systems*, Springer, Boston, 605-611, 2015.
3. 顧客満足度を考慮した従業員満足度モデル - レストランにおける職種による差異の分析 -, *日本経営工学会論文誌*, 67 (1), 59-69, 2016

■今後の研究の方向性

食・食ビジネス分野への AI 活用が広がっています。健康寿命延伸・ヘルスケア・人との関わりを活かした新たなコミュニティづくり (地域活性) など食を通じた社会課題解決に期待が高まっています。

「食・食サービス」を対象に、人 (マネジメント) を陽にモデル化した持続可能なサービスシステムデザイン・マネジメント研究に取り組んでいきます。JSPS 科研費、企業との共同研究、神戸大学・慶應義塾大学・産業技術総合研究所・福井県鯖江市との共同研究など

早川 貴 (はやかわ たかし)



■専門分野

商学、マーケティング論、マーケティング・コミュニケーション

■所属学会

日本広告学会、日本商業学会、国際戦略経営研究学会、日本情報経営学会、アジア経営学会

■これまでの研究の概要

広告を中心としたマーケティング・コミュニケーションの社会的機能に関する研究を進めてきました。広告は、製品の買手にとって購買選択を助ける重要な情報源である一方、不誠実な売手にとっては、嘘の広告・紛らわしい広告などによって、不当に売上を伸ばすことを助ける格好の手段ともなりえます。従来の私の研究は、不誠実な広告や表示を市場から排除する目的をもって行ってきたもので、誠実な広告・表示のみが経済的に利益を生むような市場の条件や社会的制度（品質シグナリング広告機構とよばれます）に関する研究です。特に、品質評価に専門性を要する消費財の取引と、技術志向の中間財の取引を主要な対象として研究してきました。

■主要研究業績

早川貴 (2016) 「『機能性表示食品』で役割を増す品質シグナルとしての広告」, 『日経広告研究所報』, 50(2), pp 2-8.

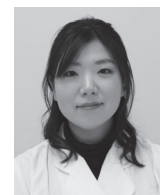
早川貴 (2016) 「水産特区政策下におけるマクロ・マーケティング課題」, 『戦略経営ジャーナル』, 3(3), pp.3-16.

早川貴 (2015) 「現代経済学の中の広告理解」, 『広告コミュニケーション研究ハンドブック』, 水野由多加・妹尾俊之・伊吹勇亮編著, 有斐閣, pp.21-38.

■今後の研究の方向性

引き続き、広告を中心としたマーケティング・コミュニケーションの研究を進めますが、食マネジメント学部では、シズル表現に関する研究を、特に深めたいと考えています。シズル表現は、その真偽を問えるものばかりではありませんが、シズル表現一般においても誠実であることが、長期的には売手の利益になると思われます。

本田 智 巳 (ほんだ ともみ)



■専門分野

調理科学、食物学、産官学連携

■所属学会

園芸学会、農芸化学会

■これまでの研究の概要

1) 産官学連携による農業振興および健康増進のためのレシピ・農産加工品等の開発

企業や自治体と共同で特産物や未利用農産物を使用したレシピおよび加工品等の開発を行い、地産地消および農産物摂取量向上を推進してきました。また、調理講習会の実施による食育の普及や、フードツーリズム支援による地域活性化にも取り組んでいます。

2) 農産物の抗酸化特性に関する研究

機能性を重視した農産物の品種育成に期待が高まる中、外観や食味、肉質といった嗜好性によって評価されてきたナスを機能性という新たな視点で再評価し、機能性向上を目的とした育種素材として有用な形質をもつ品種の探索と、抗酸化特性の変動要因について研究してきました。

■主要研究業績

・種子形成がナス果実のポリフェノール含量および抗酸化活性に及ぼす影響, 農業生産技術管理学会誌, 19 (3), 89-93, 2012

・Inheritance of anthocyanin pigment and photosensitivity in Eggplant (*Solanum melongena* L.) Fruit, *Environmental Control in Biology*, 50 (1), 75-80, 2012

・Varietal differences in the chlorogenic acid, anthocyanin, soluble sugar, organic acid, and amino acid concentrations of eggplant fruit, *The Journal of Horticultural Science and Biotechnology*, 88 (5), 657-663, 2013

■今後の研究の方向性

日本の「食」を取り巻く問題が深刻化する中、地域の環境特性や地域資源の魅力を確認しつつ、生産者の思いに触れながら特産物を活用することで、社会に貢献できるような研究を行っていきたくと考えています。また、若年層への健康的な食生活の実践と地産地消推進のため、SNSを活用した食育啓発活動に取り組めます。

本 田 豊 (ほんだ ゆたか)



■専門分野

日本経済論、福祉経済論、地域経済政策

■所属学会

環太平洋産業連関分析学会

■これまでの研究の概要

- (1) モデル・シミュレーションに関する研究成果として、希望ある高齢化社会の構築と財政再建という相矛盾する2つの政策課題の同時解決を可能とする政策パッケージを明示するために、日本経済の長期計量モデルを構築し、シミュレーション分析を行いました。
- (2) 地域経済の活性化に関する研究成果として、東日本大震災での被災自治体の人口減少と産業の空洞化を食い止め、持続可能な地域社会を達成するための長期的視点からの復興政策の在り方について政策提言を行うため、地域産業連関表やコーホート変化率法による地域別将来推計人口をもとに労働市場モデルを構築して分析しました。
- (3) 戦後日本経済について高度成長期、安定成長期、長期停滞期に時期区分して、経済成長の変遷の要因について計量分析と歴史的視点からの分析を融合して研究を行いました。

■主要研究業績

本田豊 (2004 年) 『高齢化社会と財政再建の政策シミュレーション』有斐閣。

本田豊・菊本義治・西山博幸・山口雅生 (2014 年) 『グローバル化時代の日本経済』桜井書店。

本田豊・中澤純治 (2016 年) 『東日本大震災からの地域経済復興－雇用問題と人口減少の道』ミネルヴァ書房。

■今後の研究の方向性

産業連関分析がこれまでの研究領域の一つでした。食マネジメント学部では、この研究領域を「食産業の産業連関分析」という方向で発展させ、「食」を企業経営という視点ではなく産業という視点からアプローチしていきます。当面の研究課題としては、産業連関表をもとに、日本における食産業（あるいは食関連産業）の全体像を数値的根拠も含めて具体的に明示すること、食産業間の連関構造を明らかにして、連関構造を重視するという視点から連携強化策の在り方を具体化すること、などが考えられます。

増 山 律 子 (ますやま りつこ)



■専門分野

骨・ミネラル代謝学、栄養学

■所属学会

日本内分泌学会、日本骨代謝学会、日本骨粗鬆症学会、日本歯科基礎医学会、

日本ビタミン学会、日本栄養・食糧学会、米国骨代謝学会

■これまでの研究の概要

「骨・カルシウム恒常性維持に必要な栄養条件の検討」

骨やカルシウムの恒常性に関係するビタミンDの主な作用は腸管カルシウム吸収促進であり、これが低下するとカルシウム不足により骨量は減少します。「ビタミンDはカルシウム栄養や骨の健康に必要」というこの古典的な解釈は、しばしば常識として扱われる一方で、骨における局所的な作用には不明な点が多く論議が必要とされてきました。これまでに、遺伝子組み換え技術を用いて組織特異的なビタミンD作用不全マウスを作成し、カルシウムの食事からの取り込みにおけるビタミンD作用の重要性と共に、カルシウム栄養状態に応じてビタミンDが骨量を調節するしくみを明らかにしました。また、骨組織に存在する細胞が、生体内のカルシウム動態やカルシウム栄養を感知して機能を変化させる分子メカニズムを検討しています。

■主要研究業績

Phosphate-dependent luminal ATP metabolism regulates transcellular calcium transport in intestinal epithelial cells. FASEB J. 32:1903-1915. 2018

Normocalcemia is maintained in mice under conditions of calcium malabsorption by vitamin D-induced inhibition of bone mineralization. J Clin Invest. 122:1803-15. 2012

TRPV4-mediated calcium influx regulates terminal differentiation of osteoclasts. Cell Metab. 8:257-65. 2008

■今後の研究の方向性

「食事成分の感知－多器官連携に関する研究」

消化管は様々な食事由来成分の刺激に応答する複雑な器官であり、その“ロバスト性”を生み出す要素や生物学的意義は何かを追及します。特に、骨・カルシウム恒常性を維持するしくみの中で、消化管での食事成分の感知認識メカニズムと、遠隔組織の機能との関連性を動物モデルや培養細胞システムを用いて評価する予定です。

松原豊彦(まつばら とよひこ)



■専門分野

農業経済学、アグリビジネス、農業の第6次産業化

■所属学会

日本農業経済学会、日本農業市場学会、日本カナダ学会、政治経済学・経済史学会

■これまでの研究の概要

カナダの農業構造と農民層分解、NAFTAのもとでの多国籍アグリビジネスの事業展開、カナダの農業政策をテーマに研究してきました。カナダを研究対象に選んだのは、世界有数の穀物・油糧種子の輸出国であり、日本の食料事情に大きな影響力をもっているからです。カナダの小麦・大麦の輸出システムは、国家貿易企業であるカナダ小麦局(CWB)を軸に展開してきましたが、CWBは2012年に解体され穀物販売の仕組みは大きく変わりました。北米自由貿易協定(NAFTA)のもとでカナダの穀物・油糧種子の加工や販売は大きな変貌を遂げ、アメリカの多国籍企業がその多くを支配するようになりました。国境を超えたフードシステムの形成であり、その行方を注視したいと思います。また、カナダの酪農・乳製品、鶏肉、鶏卵は、供給管理とマーケティング・ボードという独特の需給調整システム(および国境保護措置)を堅持しており、米国政府からの度重なる攻撃にもかかわらず独自のシステムにより家族経営を守ってきました。NAFTA再交渉にカナダがどう臨むかは、日本の農業・食料政策を考えるうえでも重要な課題です。

■主要研究業績

松原豊彦『カナダ農業とアグリビジネス』法律文化社、1996年

大塚茂・松原豊彦編『現代の食とアグリビジネス』有斐閣、2004年

松原豊彦・磯田宏・佐藤加寿子『新大陸型資本主義国の共生農業システム—アメリカとカナダ—』農林統計協会、2011年

■今後の研究の方向性

- ①農業の第6次産業化・・・農と食による地域経済振興を考えるうえで重要なテーマであり、6次産業化のテキスト出版を計画しています。
- ②地域連携による調査研究・・・三重県志摩市浜島町でのインターンシップ、滋賀県甲賀市の廃校活用プロジェクト、ふくい里山里湖海料理アカデミー、北海道アグリビジネスリーダー養成塾などに参加しています。近隣では草津市ブランド推進協議会、守山食のまちづくりプロジェクトの座長などを行っています。
- ③市民による食政策ネットワークの研究・・・北米の都市では近年市民による食政策ネットワーク(Civic Food Network)の活動が盛り上がっています。とくに1990年代から活動しているトロント食政策評議会(Toronto Food Policy Council)に注目し、その経験をまとめたいと思います。

南直人(みなみ なおと)



■専門分野

西洋史学 食文化研究

■所属学会

日本西洋史学会、ドイツ現代史研究会、食の文化フォーラム(味の素食の文化センター)

■これまでの研究の概要

ドイツを中心にヨーロッパの食の歴史を研究してきました。西洋史分野では、私の師匠である川北稔先生などが砂糖や茶をめぐるグローバルな歴史(帝国や植民地など)を早くから行っており、それに刺激されて、ドイツをフィールドとして食料生産、食物消費量、ジャガイモやコーヒーの普及、近代的な食システム、食をめぐるイデオロギーの歴史的变化などといったテーマを取り上げてきました。それとは別に、日本の食文化にも深い関心があり、これに関しては食欲に、どのようなテーマでも吸収してやろうと思っており、歴史に限定せずにさまざまなテーマの書物を読みあさっています。

■主要研究業績

単著『<食>から読み解くドイツ近代史』ミネルヴァ書房、2015年

単著『世界の食文化⑱ドイツ』農文協、2003年

編著『宗教と食』(食の文化フォーラム32)ドメス出版、2014年

■今後の研究の方向性

これまでと同様に、ドイツを中心としたヨーロッパの食の歴史を研究していきます。しかし同時に、私は「食総合研究センター長」の立場にあるので、学際的に食をとらえるという方向でも研究を展開していきたいと考えます。差し当たってのテーマは、最近注目されている「郷土食・郷土料理」に関する研究をいろいろな角度から行ってみたいと思います。

安井 大輔 (やすい だいすけ)



■専門分野

社会学、食研究（フードスタディーズ）

■所属学会

International Sociological Association (ISA), American Sociological Association (ASA)、
日本社会学会、日本文化人類学会、関西社会学会

■これまでの研究の概要

食という観点から、現代世界の社会問題を研究してきました。食は、食べ物・食べ方だけでなく、それを作り消費する人びとの行為、食べ方を規定する規範、生産・加工・流通のシステムまで含みます。食文化はその食の営まれる国・地域の歴史、異なる文化との相互作用、エスニック・ナショナルに動員される政治・社会的資源など、さまざまな要素が混じりあって形成されます。私はこうした社会的要素の絡み合う場所としての食を研究してきました。具体的には、国境を越える移民の食を対象にエスニックコミュニティにおける文化と差異の考察、また文化遺産としての食を対象にグローバル化の下で生じるナショナリズムの分析といった、社会文化理論と社会調査に基づく研究に取り組んできました。

■主要研究業績

- ・「食選択と社会階層—国産食品・オーガニック食品購入の規定要因」『2015年「社会階層と社会移動全国調査」(SSM調査)報告書4 教育I』pp.103-119、2018年
- ・「食文化の「型」—文化遺産としての「和食」『農と食の新しい倫理』秋津元輝・佐藤洋一郎・竹内裕文編、昭和堂、2018年（分担執筆）
- ・『フードスタディーズ・ガイドブック』ナカニシヤ出版、2019年（編著）

■今後の研究の方向性

食の比較文化研究を継続しつつ、今後は日々の食の選択と所得や学歴の計量分析など、量的データの解析も用いて、多角的なアプローチから食と社会の問題を明らかにしたいと思います。学生時代から人文社会科学の若手研究者たちと領域横断的に食研究について学んできました。また食と農をつなぐ実践活動にも関心があります。今後はそうした学際ネットワークを食研究を志す人びとの互助へと発展できればと考えています。

保井 智香子 (やすい ちかこ)



■専門分野

健康教育、栄養教育、健康スポーツ科学

■所属学会

日本栄養改善学会、日本スポーツ栄養学会、日本健康体力栄養学会、日本栄養食糧学会、
日本公衆衛生学会、日本スポーツ心理学会、日本武道学会、内田クレペリン精神検査研究会

■これまでの研究の概要

【健康増進に関する研究】

- ・中高齢女性の健康の維持増進を目的とした体重管理の目標を提示しました。
- ・適正体重を目標とする場合の高精神健康を目指す栄養指導の重要性を提示しました。

【スポーツと栄養に関する研究】

- ・運動部所属の女子中学生の貧血予防教育を行う際には、体格に左右されず、身体活動量に見合った食事量の確保が重要であることを提示しました。
- ・社会人女子ラクロス選手のアジリティ・持久的運動能力の高い者は炭水化物エネルギー比率が高く、運動能力の向上に影響を与えている可能性を提示しました。

◎食事や食習慣の調査、身体活動量調査、内田クレペリン検査などを用い、よりよい身体づくりを提案するための研究を行っています。

■主要研究業績

保井智香子、東山明子、中村富子、他：内田クレペリン検査を用いた大学生の食嗜好・食意識に関する検討、内田クレペリン検査研究会、6、16-24、2017

保井智香子、福田典子、山本雅亨、他：女子中学生の運動部所属の有無による血中ヘモグロビン濃度と身体組成、エネルギー・栄養素等摂取量との関連、日本健康体力栄養学会、21、24-29、2016

Chikako Yasui, Yukie Yoshida, Ayaka Yazawa: Target for body weight management in middle-aged and older women that attended local health classes. Japanese Journal of health, fitness and nutrition, 18, 42-49, 2013

■今後の研究の方向性

生産・加工・流通・小売や販売など食に関わる職種は数多くあります。その職業に関わる方への栄養教育や生産物や食品、商品に対して栄養に関する情報を付加価値として加えることができれば、よりよい食環境が整備されると考えています。今後は食マネジメントの分野でも栄養教育の価値が認められるものを新しく作りたいと思っています。

山中祥子 (やまなか さちこ)



■専門分野

社会心理学 食行動 潜在認知

■所属学会

日本心理学会、日本社会心理学会、日本感情心理学会、日本健康心理学会、
日本行動科学学会、日本消費者行動研究学会

■これまでの研究の概要

私たちの行動は、意識できる顕在的な態度と意識できない潜在的な態度の両方から影響を受けています。正しい知識と意思の力、すなわち顕在的な態度によって食行動を意識的にコントロールすることは容易ではなく、逆に食べたいものをがまんするという「抑制の逆説的効果」によって、食べすぎてしまうという望ましくない行動が引き起こされやすくなることから、私の研究では意識できない潜在的な態度、特に食物に対する潜在的態度と実際の食行動の関係について検討してきました。さらに最近では意識せずに食行動を変化させるための方法として、食器という環境要因を操作することで、糖尿病の患者さんの摂食量を変化させる検討などを行いました。

■主要研究業績

- ・山中祥子・山祐嗣・余語真夫 (2012) 女子大学生における高脂肪食品に対する潜在的態度の検討 社会心理学研究 27, pp.101-108.
- ・山中祥子・余語真夫 (2013) チョコレートに対する自動的態度と摂食量について 行動科学 51, pp.7-16.
- ・山中祥子・長谷川智子・坂井信之 (2016) だれかと食べるとたくさん食べる？だれかと食べるとおいしい？行動科学 54, pp.1-9.

■今後の研究の方向性

味覚、視覚、嗅覚、触覚、聴覚といった五感により得られる「おいしさ」は、何をどのくらい食べるかを決定する重要な要因の一つであり、これらは認知的な要因や文化的な要因からも影響を受けることから、今後は「おいしさ」の感じ方と実際の食行動の関係について、日仏間で比較検討していきたいと考えています。

吉積巳貴 (よしづみ みき)



■専門分野

地域振興、持続可能な発展のための教育 (ESD)、まち・地域づくり、環境教育

■所属学会

都市計画学会、農村計画学会、ESD 学会、環境経済政策学会、環境教育学会、環境情報科学

■これまでの研究の概要

地域資源を活用した住民主体型持続可能な地域づくり手法開発について、国内外のフィールドと連携しながらアクションリサーチの手法を通して研究を行っています。主な研究フィールドは、滋賀県近江八幡市、和歌山県田辺市・みなべ町・白浜町、兵庫県南あわじ市・西宮市、ベトナム国フエ省、ダナン市などです。

■主要研究業績

1. 吉積巳貴, 都市環境ガバナンス, (環境経済・政策学会編著『環境経済・政策学事典』第8章「環境政策と環境ガバナンス」), 丸善出版, 2018
2. Yoshizumi M., *Multi-stakeholder community education through environmental learning programmes in Nishinomiya*, in chapter 10 of "Educating for sustainability in post-Fukushima Japan" (Jane Singer et al. eds), p.170-183, 2016
3. 吉積巳貴, 未就園児親子のための自然体験型環境教育プログラムを通じた地域の子育て支援の可能性: 西宮市における「未就園児親子のための森の子育て支援モデル事業」, 事例を通して, 環境情報科学学術研究論文集 29, p.351-356, 2015

■今後の研究の方向性

地域の食文化や食資源を再評価し、地域資源を持続可能に利用・管理しながら、地域住民が主体的に地域づくりを行う方法を明らかにしていきます。また行政、農林漁業従事者、企業や住民と食マネジメントの教育・研究連携体制を構築し、学生がフィールドで学べる場づくりとともに、地域貢献ができる仕組みを構築していきたいと考えています。

YOTOVA MARIA (ヨトヴァ マリア)



■専門分野

文化人類学、経営人類学

■所属学会

比較文明学会、早稲田文化人類学会、International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES), European Association of Social Anthropologists (EASA)

■これまでの研究の概要

日本とブルガリアを中心に、乳製品会社や消費者コミュニティーなどで乳加工文化について研究調査を行ってきました。社会主義国家の枠組みや科学技術研究の発展、市場経済化以降の乳加工システムの変容など、各時代における国家政策や企業戦略の影響に注目しながら、ブルガリアの人びとにとってヨーグルトがいかなる文化的存在なのかを考察しています。食の技術面や物質面だけではなく、食をめぐる言説を通して、生産者・消費者としての人びとの行動や日常体験としての社会変化をダイナミックに捉えようとした点は、これまでの研究の特色です。

■主要研究業績

『ヨーグルトとブルガリア ―生成された言説とその展開―』東方出版、2012年。

Reflecting Authenticity: Grandmother's Yogurt between Bulgaria and Japan. In Nuno Domingos, José Manuel Sobral and Harry G. West (eds.), *Food between the Country and the City: Ethnographies for a Changing Global Foodscape*. Bloomsbury Academic, pp. 280-308, 2014.

Ethnographic Heritage as a Branding Strategy: A Case Study of Yogurt in Bulgaria and Japan, *Global Economic Review* 47 (1): 47-62, 2017.

■今後の研究の方向性

欧州や東アジア圏へとフィールド調査のエリアを拡大し、食の社会的な価値構築や「食べる」という日常的な行為に組み入れられた意味について通地的な議論へと展開させていきたいと思えます。また、国民意識の維持や地域の活性化手段としての食の役割について、日本の食育を事例として研究内容を継続し深めていきます。

和田 有 史 (わだ ゆうじ)



■専門分野

心理学

■所属学会

日本心理学会・日本基礎心理学会、日本認知心理学会、日本官能評価学会、日本健康教育学会

■これまでの研究の概要

心理学実験による研究

- ・人間が視覚により食品の鮮度を判断する手がかりとなる画像変数を明らかにしました。
- ・嗅覚と味覚の相互作用に、呼吸と味嗅覚刺激の順序が関与することを示しました。
- ・官能評価のエキスパートの味覚強度判断は真度と精度が高いことを測定・数値化しました。
- ・食品のイメージや食習慣に伴う食品への潜在的な態度を計測しました。
- ・乳児期に嗅覚と視覚の連合が生じていることを示しました。

インターネット調査による研究

- ・認知の個人差が食品のリスクの認識の個人差に関連していることを解明しました。
- ・昆虫食経験と食品としての昆虫のイメージの関係を示しました。
- ・消費者自身の態度によって消費者が感じる食品価値に影響することを示しました。

■主要研究業績

1. Taste of breath: the temporal order of taste and smell synchronized with breathing as a determinant for taste and olfactory integration, *Scientific Reports*, 7, 8922 (2017)
2. Superiority of Experts Over Novices in Trueness and Precision of Concentration Estimation of Sodium Chloride Solutions, *Chemical Senses*, 38 (3), 251-258 (2013)
3. Influence of luminance distribution on the appetizingly fresh appearance of cabbage. *Appetite* 54 (2) 363-368 (2010)

■今後の研究の方向性

“食”をモチーフに実験心理学の方法論を駆使して研究を行い、人の心のメカニズムの解明とその知見に基づく応用技術の開発を目指します。JSPS 科研費、農水省委託研究事業、けいはんな RC などの資金を運用し、(国研)産総研、(国研)農研機構、東大、(株)明治、サントリーなどと共同研究を行っていきます。

